恋文

秋桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋文

【Nコード】

N1571Q

【作者名】

秋桜

【あらすじ】

『俺は、お前のそばにいるから』

本当ですか？

そばに居ますか？

あなたの姿が見えない今でも

そばに居てくれていますか？

平助くん。

あなたがいなくなってから

暑い季節が過ぎ、はらはらと葉が舞う季節がきました。

あなたは、今、どこにいますか？

藤堂平助が亡くなって半年、少し肌寒い秋の物語。

(前書き)

この物語は、二次創作です。
藤堂平助の死後の物語です。

「寒いなあ……」

千鶴は、少し離れた町へ買い物に来ていた。

吹き抜ける風が頬や手を赤に染めていく。

もう少し暖かい格好をして来ればよかった、と感じさせていた。

「はあ」

手を温めるために息をはく。

ほんのりと暖かくなるが、すぐ熱は空気に溶けてしまう。

「……早く帰ろう」

平助君がいれば手をつないで。

そう考えて、すぐ寒さに思考を戻す。

半年前まで空くことが無かった右手。

今は寒い風だけが心と手を埋めていく。

「・・・寒いな」

半年前。

平助は、桜吹雪とともに灰となって消えた。

まるで新撰組の皆が迎えに来るように、桜とともに。

千鶴の手には、少しも残さず灰となって消えた。

消えてしまった。

彼は、もういないのだ。

それを実感してしまう寒さと寂しさを運ぶ秋。

寒さも寂しさも解けて交わってしまつて、判別などつかない。

そう考えていたとき、遠くから聞き覚えのある声が目をつついた。

「おーい！千鶴ちゃん！」

「……永倉さん?!」

「久しぶりだなあ。いつぶりだあ？」

「女らしくなつてたから、一瞬気づかなかつたぜ！」

「どうしてこちらに?」

「ああ。……それよりも寒いなあ……少し中ではなさねえ?」

「……ふふ。そうですね。家に行きましょう」

「おつ！すまねえ」

町から家に帰る途中、懐かしい話、最近の話。

色々な話ができる。

少しでも暖かいと思えた。

「こちらです」

「おお！ここかあ！」

きしむ扉を開けると小さな室内が見える。

今お茶をおもちします。

そう言おうとした時だった。

「千鶴ちゃん。平助は、どうだった」

「……」

『どうだった』。

「最後は、桜とともに」

「そっか」

永倉は、すべてを悟ったようだった。

「そんでき、今日こっちに来たのは。これ」

「なんですか？手紙？」

「いいから、見てみるって」

永倉が、突き出している手紙を受け取る。

少し桃色がかつた和紙の便せん。

裏を見ると、震えた字で『千鶴へ』と書いてあった。

「……！これ……」

「半年前ぐらいに平助から俺のところに送られてきてよ」

「平助くんから……」

「千鶴にわたしてくれ。って」

封筒をあけ、中身を取り出す。

『千鶴へ』

震えた字。でもよく知った字。

『これを読んでるっつうことは、俺はもういないっつうことか』

『しんぱっつあんに渡したから不安だったけど、届けてくれたみたいだな』

きつと死が近いことを知っていたのだ。

だから震えた字でも、最後に残した。

読み進めていくうちに、枯れたはずの涙が頬を伝った。

『1人で寂しくねえか?』

『泣いてないか?』

そんな心配ばかりが書いてある。

「……………っ……………心配ばかり……………り……………」

1枚の手紙の最後。

『俺は、お前のそばにいる。だから』

彼との約束。

『だからね』

彼の

『笑ってくれよな』

最後の言葉。

「……っ」

「あいつ、俺への手紙でさ」

「千鶴ちゃんのことばっかり書いてやがってね」

「……………つく……………」

「俺のことなんか全然なんだぜ」

「……………う……………」

「あいつ幸せだったんだな」

「……………しあ……………わせ……………ですか？」

幸せ。

かけがえのない幸せ。

最後の日も

『幸せだったなあ』

そうだった彼。

彼が最後に残した恋文。

幸せをくれた人への最後の

ありがとう

「笑ってやってくれよ」

「……………はい……………」

「千鶴ちゃん」

「はい」

「あいつと……………平助と一緒に幸せだったか？」

「……………」

笑おう。

あなたがそばにいてくれるから。

あなたが願ったから。

あなたが幸せだったから。

あなたを

「はい。とても幸せでした。とても、とても

愛しているから。

平助くん。

私は幸せでした。

あなたと過ごさせて。

あなたと笑えて。

だから心配しなくていいよ。

だけでもう少しそばにいてね。

もう少し待っててね。

来世でもっと幸せになろう。

あなたといつまでも一緒に。

あなたといつまでも幸せに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1571q/>

恋文

2011年1月15日21時27分発行